

「メディア・アート」って何だろ？



文化庁メディア芸術祭 東京都写真美術館での展示風景

メディア・アートと言われて、どのようなタイプの作品を思い浮かべますか。絵画でもないし、彫刻でもない。メディア・アートと呼ばれる作品を見ていると、映像やコンピュータを使ったものが多いようです。美術のジャンルは、長い間、素材と結びつけて分類されてきました。紙に絵具で描かれていれば絵画、粘土で形が造られていれば彫塑（彫刻）といったようになります。ではビデオやコンピュータを使えば、それはメディア・アートということなのでしょうか。そうだともしそうでないとも言えます。メディア・アートというのは新しい分野で、急速に姿を変えているので、その領域をはっきりさせるのが難しいのです。実際、文化庁では漫画やアニメーションをメディア・アートに含めて考えています。特定のメディア（素材・媒体）との結びつきをもたないのが、メディア・アートの特徴と言った方が適切でしょう。

メディアとアートのかかわりが注目されるようになったのは、1960年代からです。この場合の「メディア」というのは、マス・メディアを指しています。現代人のコミュニケーションにおいて避けることのできないマス・メディアの影響力が、アートにも及んだのです。新聞やポスターなど印刷物の体裁をとっていたり、テレビやビルボード（屋外の看板）を使って、マス・メディアを批判したり揶揄したりする作品が生み出されました。

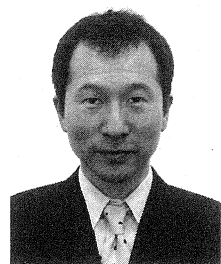
近年、コンピュータが個人にも普及し、それがアートにも浸透してきました。これまで文字や静止画像がもたらだったコンピュータで、動画や音声扱えるよう

になります。この「マルチメディア」によって、コンピュータが表現の広汎な分野に採用されるようになりました。また90年代後半、インターネットや携帯電話の爆発的ともいえる普及によって、コミュニケーションも大きく変化しました。こうした情報技術（IT）の飛躍的な進歩が、マス・メディアの在り方を変貌させているのは今我々が眼にしているとおりです。これらによってメディア・アートにもコンピュータが深く浸透することになったのです。

とはいえメディア・アートすなわちコンピュータ・アートといったように、「こういう形のもの」と決めつけて考える必要はないでしょう。コンピュータが将来どのような形に発展するのかよく解りません。携帯電話があつという間に小型化し、メールやカメラといった種々の機能を付け加えていくように、あるいはいつの間にかレコードを駆逐してしまったCDの地位が、ポッドキャスト（ネットによる音声配信の技術）に脅かされつつあるように、テクノロジーの進歩によってメディアの動向は日々刻々変化しつつあり、それに応じてメディア・アートの形態も変貌しています。変化する姿こそメディア・アートの本質と言うべきでしょう。

文化庁芸術文化課  
芸術文化調査官

野口玲一



文化庁メディア芸術祭  
作品募集中（10/20まで）

ホームページ：<http://plaza.bunka.go.jp/>を  
ご覧ください。